

2020年07月28日(火)【外為Lab】松田哲

タイトル:【ユーロ/ドルが、重要なチャート・ポイントを上に抜けた】

ユーロ/ドルが、先週(7月21日、22日ころ)、重要なチャート・ポイントである1.1500アラウンドを上に抜けた。

重要なチャート・ポイントを上に抜けたことで、ユーロ/ドルは、「買いシグナル」を発した、と考えます。

そして、1.1500アラウンドを上に抜けたことで、ユーロ/ドルは、従来下落トレンドから、上昇トレンドに転換した可能性がある、と考えます。

+++++

ヨーロッパの不景気は、長く続いており、ユーロの超低金利政策も長期にわたっています。

ヨーロッパの失業率も、悪い状況が続いており、新型コロナウイルスの感染拡大もあって、その状況は、決して、改善されていません。

そういった状況下で、ユーロは対米ドルで、長きにわたり、下落傾向を示していました。

+++++

3月12日のECB理事会では、新型コロナウイルスの感染拡大に対応するために、政策金利の引き下げが実施されるのではないかと、マーケット(市場参加者)は期待していたのですが、3月12日の時点では、政策金利の引き下げが見送りされました。

つまり、政策金利の据え置きが発表された。

ただし、量的緩和政策を年末まで1200億ユーロ拡大する、と決定した。

この程度の政策では、欧州経済のリセッション(景気後退)は避けられない、といった理由で、欧州債券、欧州株式が、大幅に下落した。

イタリア国債の下落が大きく、ドイツ国債とのイールド・スプレッド(金利差)が、大きく開いた。

ラガルドECB総裁が、ECBの存在理由は、債券スプレッドを埋めることではない、と発言したため、イタリア国債などの経済的に弱い国の債権が積極的に売られた。

これらを総合的に判断して、3月12日以降の外国為替市場は、「ユーロ売り米ドル買い」に反応した、と考えます。

その結果、ユーロ／ドルは、相対的な安値圏で推移した、と考えます。

+++++

ところが、先月（6月4日）のECB理事会で、新型コロナウイルス問題への対応策として、パンデミック緊急購入プログラム（PEPP）の購入額を6000億ユーロ増額し、少なくとも2021年6月末まで継続する、と発表した。

この増額は、市場の予想を上回り、「ユーロ買い米ドル売り」に大きく反応した。

このパンデミック緊急購入プログラム（PEPP）が、相場の転換の材料になっている、と考えます。

+++++

今月（7月16日）のECB理事会は、事前の予想通りに、政策金利の据え置きが発表された。

パンデミック緊急資産購入プログラム（PEPP）も、事前の予想通りに、1.35兆ユーロで維持される旨発表された。

+++++

そして、先週（7月21日）、EU首脳会議で、新型コロナウイルス問題への「復興基金」として、総額7500億ユーロを設定する旨の合意が成立した。

+++++

マーケット（市場参加者）は、一連の欧州の政策を好感し、「ユーロ買い米ドル売り」に向かっている、と考えます。

その結果として、ユーロ／ドルが、先週（7月21日、22日ころ）、重要なチャート・ポイントである1.1500アラウンドを上を抜けた、と考えます。

+++++

（2020年07月28日東京時間16：20記述）